

アリー・フェルドウスイー

正義こそ人々の願いーカイロからウォール街へ

個人的な話から書き始めることをお許し願いたい。私は生まれはイラン人だが、今では住まいも職場もカリフォルニア北部にある。このようにアイデンティティや関心がこの小さな地球上に拡散している現代社会のありふれた一市民として、私は次のように感じている。すなわち、私たちは既にグローバル化した世界に住んでおり、世界各地で繰り広げられる政治的な出来事を、各地に根ざした形で立ち現れている普遍的現象として捉えるべきであると。

私は夏にカイロのタハリール広場を訪れた。現在はオークランドで暮らしているが、ここではほんの数日前に警察が「ウォール街を占拠せよ」と抗議する群衆に向けて催涙ガス弾やゴム弾を放った。オークランドでの警察の蛮行と、カイロやテヘランでの当局による容赦のない残忍な行為や、バーレーンやシリアにおけるさらに酷い事態を比べることは唐突に思われるかもしれないが、他方で二一世紀初めの数十年間を象徴する政治的な抗議の声に貫流している共通のテーマを私にはすぐに読み取ることができると。その共通のテーマとは正義の要求である。

アリストテレスは、その著書『政治学』において、国制を国家の見取図と形態の双方を指すものとして定義した。国制は、支配する権利を享受する公民層の数的な多寡に基づいて、三種類の形態を取り得る。政治的な統治権、すなわち政治を担う権利が一人に与えられるときは王制、少数者の場合は貴族制、多数者のと

きは民主制となる。

これら三つの国家形態は、支配する者が自らの利益のためではなく、都市国家全体の利益のために統治する限りにおいて、いずれも善良もしくは公正なものであった。しかしこうした公正な国家形態の対極には、三つの「逸脱した」形態がある。統治する権利を享受する者が、都市国家の普遍的な利益ではなく、私的な利益を求めて統治権を行使するとき、逸脱した国家形態が生まれる。例えば、寡頭制とは貴族制の逸脱した形態であり、そこでは金満家が自己や身内の懐に富を貯えるために権力を用いる。アリストテレスにとって最も重要なことは、国家の形態ではなく、国家が公正に、つまり普遍的な利益を追求して統治されているかどうかであった。

こうしたアリストテレスによる善良な国家とその逸脱した形態という明確な区別に基づけば、欧米における「ウォール街を占拠せよ」という抗議と、北アフリカや中東での「アラブの春」に端的に示されている現在の政治情勢は、大多数の人々が国家の「逸脱」と考えているものに対する、彼らの反発を共通の特徴としていえると言えらる。政府が国民の大多数を裏切つて、全国民の普遍的な利益よりも権力をもつ裕福な少数グループの利益を優先している、あるいは「ウォール街を占拠せよ」と抗議する者の言い回しに従えば、政府が富裕層1%の利益を残り九九%の国民の利益よりも重視している。これはエジプトのムバラク体制、

リビアのカダフィ体制、シリアのアサド体制、およびバーレーンのハリファによるスンナ派体制に対する反乱の内実そのものである。一〇月中旬に開催された第一二五回総会における国連事務総長の演説での発言によると、今日、世界が直面している最大の課題は政府に対する「信頼の失墜」にあるという。

従って、政治に対する現在の抗議の声は、世界のガバナンスにおいて実在するか、存在すると考えられている不正に対するものである。「アラブの春」を、専ら民主主義を求める運動と定義してしまうと、グローバル化後の世界における「恵まれない彼ら」と「幸運な我ら」という単純な二分法に依拠した通念がこれからもまかり通ることになる。

ここで民主主義はどのような関わってくるのだろうか。当然ながらアラブの人々も民主主義を求めている。しかし、それは単純に彼らが正義を欲しているからである。アラブ人にとって民主主義は、彼らを支配している逸脱した国家形態から「抜け出す」ための最善の方途であるといえる。欧米社会で私たちが闘っているのは、民主的な権利を用いて、政府が富裕層によつて操られる国家に陥っている状況を「覆す」ためである。私たちは中東と北米という異なった二つの場所から、民主主義と正義をめぐる一連の闘いに臨んでいる。しかし結局のところ、私たちにとって最も重要なのは、やはり国家が正義に過っているかどうかということなのである。

アリー・フェルドウスイー

アメリカ、ノートルダム・ドゥ・ナムール大学 教授